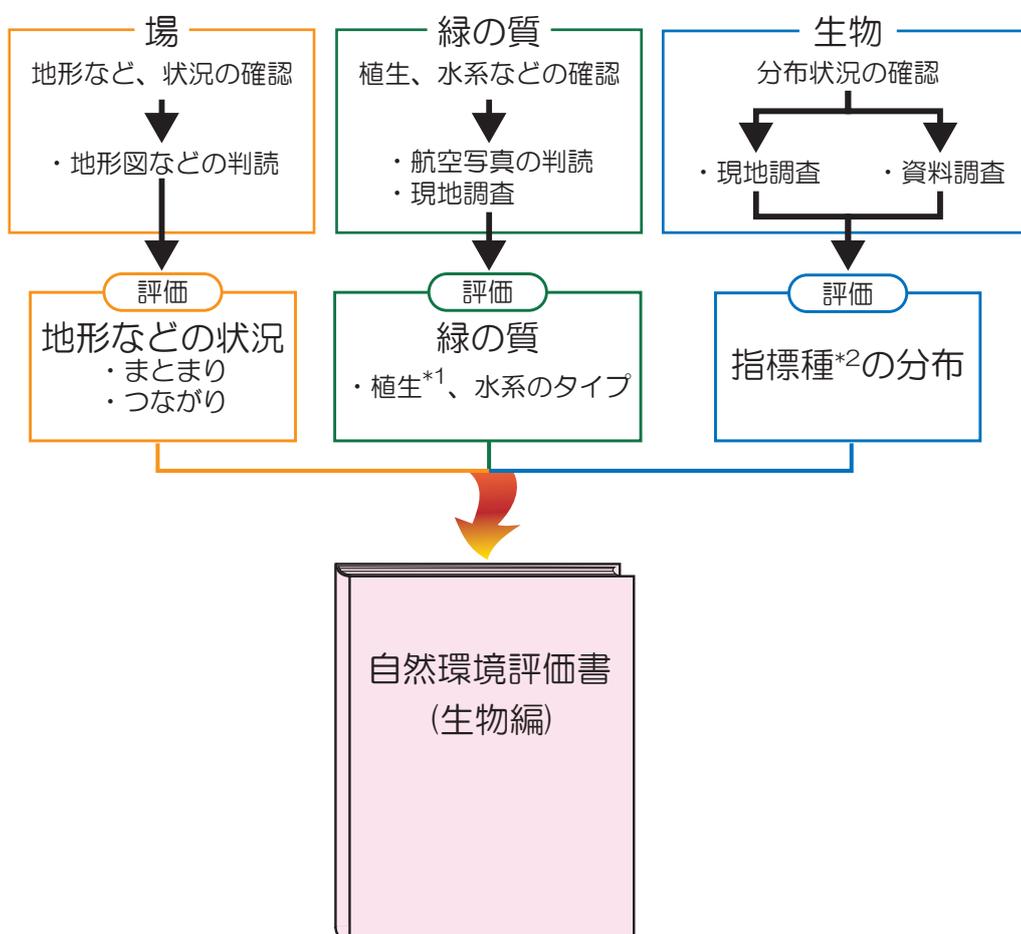


2. 自然環境評価の流れ

2.1 自然環境評価の方針

保全の視点

西部丘陵地域は、市内でもっとも自然環境が豊かな地域です。この中で特に緊急の保全措置が必要な場所や、場所に応じた保全策を検討するための基礎資料とすることを狙いとしてきました。したがって、地域の中で高い評価を得られなかった地区であっても、それを根拠に無秩序な開発が許されるというものではありません。



■自然環境評価書作成の流れ

調査地域の地理的な条件、緑の質、生物の生息状況などを総合的に評価しました。

*1 植生：ある場所に生育している植物の集団のこと。大まかには、草原、森林など。学術的にはコナラ群落、スダジイ群落などがある。

*2 指標種：一定の環境条件下で生息、生育するため、その生物の存在が環境条件を知る手掛りとなる種

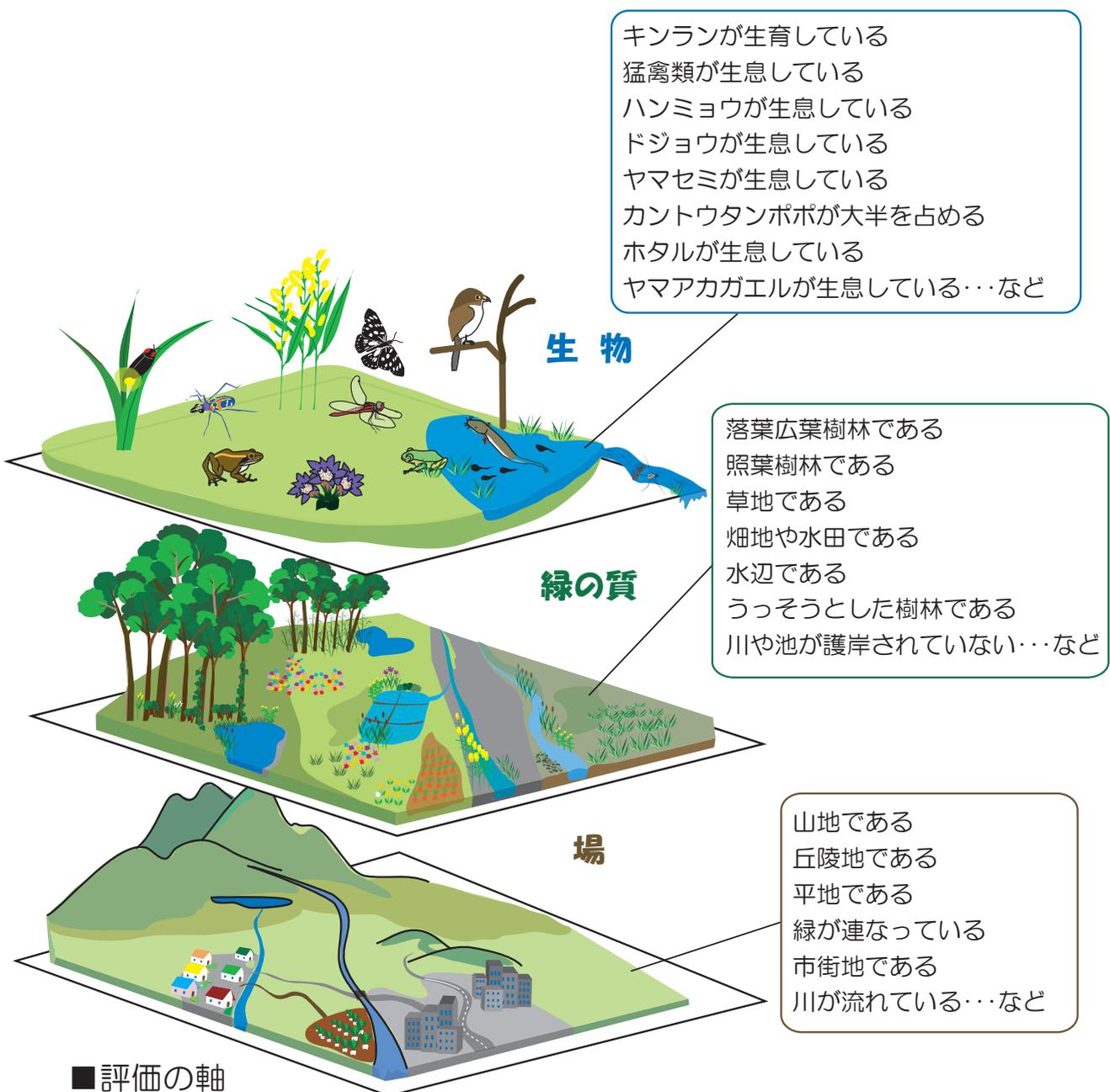
評価の軸

生物編の評価にあたっては「場」、「緑の質」、「生物」の3つの軸を用いて自然環境をとらえ、これらの個別評価を統合して評価を行いました。

場 : 地形や緑の連続性など、地域の地理的条件や自然の重要性

緑の質: 植生と水辺の状況からみた、生物の「生息場所」としての質

生物: 指標種の分布からみた、生息する生物の豊かさ

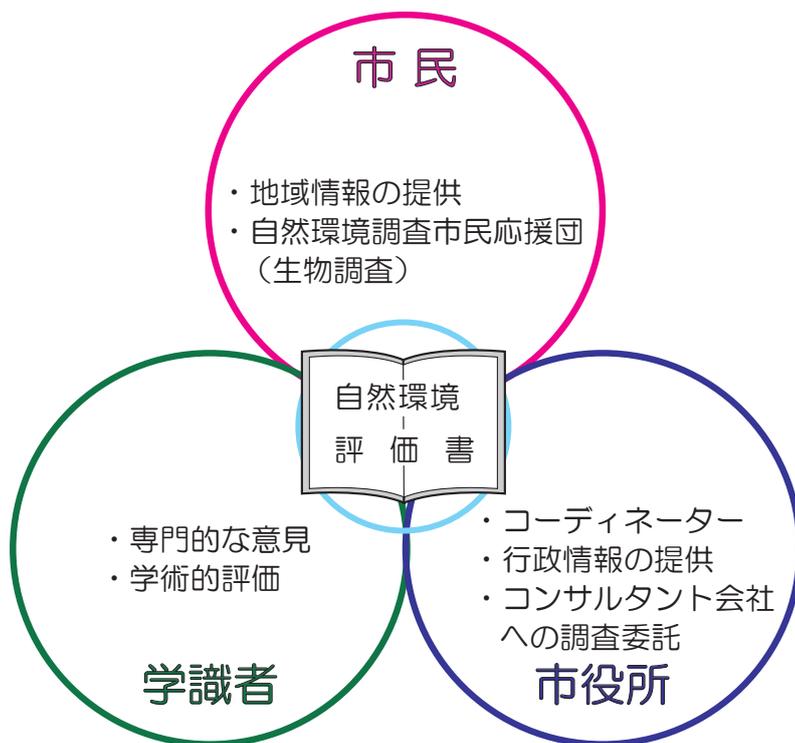


2.2 自然環境評価に携わった人びと

自然環境評価には、評価手法の検討、情報収集、現地調査、評価、とりまとめという作業の中で、様々な人びとに携わっていただきました。

評価手法の検討と実際の評価作業にあたっては、学識者と自然環境に関心のある市民からなる検討会で協議しながら進めました。この結果、精度の高い自然情報に基づいて地域の自然に適した評価手法を選定することができました。

現地調査にあたっては、生物に詳しい市民ボランティアからなる「自然環境調査市民応援団」に御協力をいただきました。また、平塚市博物館が中心となって行われたタンポポ調査や過去の生物調査の結果も利用させていただきました。



■自然環境評価書作成に携わった人びと

市民、学識者、市役所がそれぞれの役割を分担しました。



検討会の様子

評価書作成のための検討会を開き、意見や情報の交換を行いました。



野外での生物の調査

自然環境調査市民応援団を中心に、みんなで手分けして調査を行いました。

市民による環境調査のサポート

自然環境調査市民応援団

今回の自然環境評価書作成にあたっては、生物に詳しい市民ボランティアからなる、「自然環境調査市民応援団」が結成されました。参加者は六つの班に分かれて調査と記録を担当しました。

- ◎ タンポポ班・・・市博物館と共同でタンポポの分布調査を担当
- ◎ トンボ班[※]・・・市内に生息するトンボの調査を担当
- ◎ さえずり班・・・鳥類の調査を担当
- ◎ ホタル班・・・おもな河川や水田でホタルの発光状況の調査を担当
- ◎ 秋の虫班・・・市博物館と共同で秋にみられる虫の調査を担当
- ◎ 魚 班・・・おもな河川や池に生息する魚類の調査を担当

※トンボ調査は全域の調査ができませんでした。そのため、調査結果の扱いは、ほかの指標種とは区別し、記録された種は8章に記載しました。

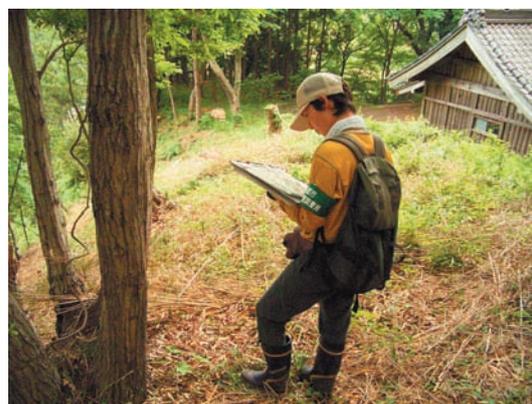
平塚市博物館のタンポポ調査

平塚市博物館の行事のなかに、1978年より続く地域調査があります。「みんなで調べよう」というこの行事では、市民からの調査協力者を募り、毎年1テーマで市内の動植物の分布を調べています。今までに、タンポポ、セミのぬげがら、ツバメ、カエルなどがテーマとして選ばれており、「タンポポ調べ」はこの行事の第一回目のテーマでした。それから25年後の2003年～2004年、博物館で、再び「タンポポ調べ」を行い、この26年間で分布の変化を比較しました。

今回の自然環境評価書作成にあたって、「2003年～2004年のタンポポ調べ」の結果や「カエル調査」の結果が指標種の評価対象のひとつとして反映されています。



ホタル調査説明会の様子



植物調査の様子